Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

Violence Exposure and Resulting Psychological Effects Suffered by Psychiatric Visiting Nurses in Japan

Fujimoto, Hirokazu

(Degree)
博士（保健学）

(Date of Degree)
2018-03-07

(Date of Publication)
2020-03-07

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
乙第3345号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003345

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式５）

学位論文の内容要旨

氏　　名　　藤本 浩一

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

Violence Exposure and Resulting Psychological Effects
Suffered by Psychiatric Visiting Nurses in Japan

（日本における精神科訪問看護師の暴力曝露とその心理的影響）

背景：

ヘルスケア領域における暴力は長年の問題であり、International Council of Nursing（国際看護師連盟）をはじめとした医療専門職の労働にかかわる各機関は、暴力曝露を防ぐためのガイドライン等を示している。近年、在宅医療サービスの現場における専門職者の暴力曝露が注目されつつある。我が国において、精神科訪問看護師は精神障害を持ちながら地域で暮らしている患者への在宅医療サービスを提供するうえで、主要な役割を担っている。しかし、我が国の精神科訪問看護師が曝露する暴力の実情は未だ明らかでない。

目的：

本研究の目的は、日本の精神科訪問看護師を対象として、暴力に曝露した経験の実情を明らかにし、暴力曝露に関連する精神科訪問看護師の要因を検討すること、暴力曝露によって精神科訪問看護師に生じる心理的影響を明らかにすることであった。

方法：

本研究は、横断的予測研究デザインを採用した。研究データは、調査票を精神科訪問看護師に配布・回収することで収集した。

調査票の質問項目は、①精神科訪問看護師の属性、②精神科訪問看護師の労働状況、③これまでの精神科訪問看護のキャリアのなかで、訪問看護の最中に暴力（身体的暴力、言語的暴力、性的ハラスメント、脅迫・威嚇行為、器物破損）に曝露した経験の有無、④過去 12 ヶ月間に各暴力に曝露した経験の有無、もし経験があれば過去 12 ヶ月間に各暴力に曝露した回数、⑤これまでの精神科訪問看護のキャリアで最も印象的な暴力曝露のエピソードに関する Impact of Event Scale-Revised 日本語版（IES-R-J)を用いた心的外傷後の苦痛症状の測定、から構成された。

データの分析は、まず記述集計を実施し、対象者の特徴と暴力曝露経験の実情を明らかにした。次に、精神科訪問看護師の要因（属性と労働状況）と過去 12 ヶ月間の暴力曝露の経験の関連について、$\chi 2$ 乗検定もしくは Fisher の正確確率検定を用いて検討した。次に、有意な関連を示した要因を独立変数、過去 12 ヶ月間の暴力曝露の経験の有無を従属変数として、2 項ロジスティック回帰分析を実施した。統計解析には IBM SPSS statistics ver.22.0 を用いた。

結果：

精神科訪問看護ステーション 63 施設に所属する 226 名の精神科訪問看護師に調査票を配布した。98 部を回収し、うち 94 部を有効回答（有効回答率 42%）とした。

研究対象者の属性として、女性 73 名（78%）、平均年齢 46.1 ±9.1 歳、精神科訪問看護の経験期間は中央値 4.6 年（0.1－25.0）であった。労働状況として、常勤が 86 名（92%）、月あたりの訪問件数は平均 59.0 ±40.7 件であった。

これまでの精神科訪問看護のキャリアのなかで、何らかの暴力に曝露した経験がある精神科訪問看護師は 49 名（53%）であった。また、過去 12 ヶ月間に暴力に曝露した経

（別紙様式５）

（氏名：藤本 浩一　NO.2）

験がある精神科訪問看護師は 38 名（41%）であり、今回調査した暴力の種別のうち、曝露した精神科訪問看護師の割合、ならびに曝露した回数が最も多かった暴力は言語的暴力であった。

暴力曝露に関連する精神科訪問看護師の要因の検討に関しては、過去 12 ヶ月間に各暴力に曝露した研究対象者数の少なさを考慮して、2 項ロジスティック回帰分析は「過去 12 ヶ月間に言語的暴力に曝露した経験の有無」を従属変数としたモデルで実施した。$\chi 2$ 乗検定もしくは Fisher の正確確率検定を用いた解析で、過去 12 ヶ月間の言語的暴力への曝露と有意な関連を示した「精神科訪問看護経験期間」ならびに「月あたりの訪問件数」を独立変数とした。独立変数はそれぞれの四分位数で 4 カテゴリー化し、強制投入法を用いて分析した。独立変数間の多重共線性は否定され（VIF = 1.000）、尤度比検定より有意なモデルであることが示された（$p = .000$）。精神科訪問看護の経験期間が 24 ヶ月未満であることに比べて、72 ヶ月以上であることは過去 12 ヶ月間の言語的暴力への曝露にポジティブに関連していた($\beta = 1.81$, OR 6.10, 95% CI [1.31, 28.46], $p = .021$)。また、月あたりの訪問件数が 30 件以下であることに比べて、31～60 件であること($\beta = 1.80$, OR 6.04, 95% CI [1.09, 33.36], $p = .039$)、61～90 件であること($\beta = 2.13$, OR 8.38, 95% CI [1.44, 48.68], $p = .018$)、91 件以上であること($\beta = 2.26$, OR 9.59, 95% CI [1.66, 55.55], $p = .012$)は、過去 12 ヶ月間における言語的暴力への曝露にポジティブに関連していた。

精神科訪問看護のキャリアで、何らかの暴力に曝露した経験がある精神科訪問看護師 49 名のうち、34 名から IES-R-J の回答を得た。IES-R-J のスコアは中央値 2.0（四分位範囲＝5.0、範囲：0－53）であり、34 名中 2 名（6%）が PTSD のハイリスクである可能性を示した。IES-R-J のスコアと研究対象者の属性や労働状況、最も印象的な暴力に曝露してからの経過時間の間に有意な関連を認めなかった（$p > .05$）。

考察：

精神科訪問看護師の半数が精神科訪問看護のキャリアのなかで何らかの暴力曝露を経験し、約 4 割が過去 12 ヶ月間に何らかの暴力曝露を経験していた。曝露する頻度が最も高い暴力の種別は、言語的暴力であった。このことから、暴力曝露を防ぐための方針や対策は、精神科訪問看護師は言語的暴力を中心とした暴力曝露のハイリスクにあるというエビデンスを反映して開発・修正していくことが求められる。また、精神科訪問看護経験期間が長いことや、月当たりの訪問件数が多いことと言語的暴力への曝露がポジティブに関連していた。精神科訪問看護経験期間が長いことや、数多くの訪問を遂行することと言語的暴力の曝露に関連があるという情報を看護師に教育として提供することや、暴力曝露のリスクアセスメントの観点に加えることが必要である。

精神科訪問看護師は暴力曝露によって生じた心的苦痛を経験していた。残存する心的苦痛を持ちながら精神科訪問看護という職務を継続する看護師に対して、職務を遂行するうえでのサポートと安全な労働環境の提供が必要である。

指導教員氏名：グライナー 智恵子

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	藤本　浩一		
論文題目	Violence Exposure and Resulting Psychological Effects Suffered by Psychiatric Visiting Nurses in Japan （日本における精神科訪問看護師の暴力曝露とその心理的影響）		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	主　査	教授	グライナー　智恵子
	副　査	教授	橋　本　健　志
	副　査		印
	副　査		印

要　旨

本研究は、日本の精神科訪問看護師を対象として、暴力に曝露した経験の実情を明らかにし、暴力曝露に関連する精神科訪問看護師の要因を検討すること、暴力曝露によって精神科訪問看護師に生じる心理的影響を明らかにすることを目的とした。精神科訪問看護事業所に勤務する精神科訪問看護師を対象に、暴力曝露の経験や労働状況、Impact of Event Scale-Revised 日本語版（IES-R-J）を用いた心的外傷後の苦痛症状等について質問紙調査を実施した。

暴力曝露経験のある精神科訪問看護師は回答者の 53%、過去 12 ヶ月間では 41%、曝露した回数の最も多い暴力は言語的暴力であった。過去 12 ヶ月間の言語的暴力曝露の有無を従属変数、精神科訪問看護経験期間、月当たりの訪問件数を独立変数とした 2 項ロジスティック回帰分析を実施した結果、精神科訪問看護の経験期間が 24 ヶ月であることに比べて、72 ヶ月以上であること、月あたりの訪問件数が 30 件以下であることに比べて、31-60 件、61-90 件、91 件以上であることが暴力曝露にポジティブに関連していることが明らかとなった。また、IES-R-J スコア回答者の 6%が PTSD ハイリスクである可能性が示された。

本研究は、精神科訪問看護師が曝露した暴力の特徴や言語的暴力への関連要因、心理的影響について重要な知見を得たものであり、精神科訪問看護師の暴力曝露防止に向けた方針や対策開発につながる価値ある集積であると認める。

よって，学位申請者の藤本浩一氏は，博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。

Violence exposure and resulting psychological effects suffered by psychiatric visiting nurses in Japan. Fujimoto H, Hirota M, Kodama T, Greiner C, Hashimoto T. Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing, 24(8), 638-647, 2017. DOI: 10.1111/jpm.12412